

指文字の獲得と流暢性に及ぼす指導効果の実験的検討

○大土恵子

(大阪府立中央聴覚支援学校)

KEY WORDS: 流暢性指導

野田航

(大阪教育大学教育学部)

指文字指導 聾教育

(目的)

聴覚特別支援学校では、教員が手話や指文字を獲得しなければならないという特有の課題がある。新しく赴任する教員の多くは手話ができないため、生徒は授業を理解しにくく、教育を受ける権利が侵害される場合がある。一方教員は短期間に手話を習得しなければならない。そこで、この課題を解決する方法を探るため、指文字の獲得と流暢性の向上を目指した指導の効果を実験的に検討した。

効果的な指導プログラムを作成するためには、指導する行動の習熟段階を考慮する必要がある。行動の習熟段階に即した指導を行うために役立つ枠組みとして「指導の階層性」(Haring & Eaton, 1978) という考え方がある。その段階とは獲得段階、流暢性段階、維持段階、般化段階、適用段階の5つである。一般に、課題を獲得し正答率が100%になると目的を達したと思われる学習を終了しがちである。しかし先行研究では、その行動を流暢に実行できるようにさらに学習すれば、学習が保持されることが示されている。流暢になるには、短時間のタイムトライアルを何度も反復させることが効果的で、これを「流暢性指導」という。この指導には、その行動自体が非常に楽しいものになるという利点がある(Lindsley, 1996)。そのため学習者に他の指導法より好まれやすく、自信を持つようになると示されている。本研究では指文字の読み取り能力に対してこの流暢性指導を試みた。

(方法と結果)

研究1 指文字の読みスキルに及ぼす流暢性指導の効果

X年10月～12月に、指文字を学習した経験のないA大学の学生5名他の計6名に、指文字20字の指導を行った。6名が20字を獲得した後、20字のうちAセットの10字には流暢性指導を行い、Bセットの10字には統制条件として流暢性指導を行わなかった。流暢性指導はAセットの10字をランダムに繰り返した用紙を30秒間に出来るだけ早く読み取るタイムトライアルを行い、30秒間に60字を読めたときに流暢になったと判断した。流暢性指導の前後に、30秒間に何文字を読めるかのプレテスト、ポストテストを行い、2週間後にフォローアップテストを行った。流暢性指導の有無を独立変数とした参加者内実験デザインで指導の効果を検討した。

正しく読めた平均文字数について、指導条件(2)×時期(3)の2要因分散分析を行ったところ、プレテストにおける指導条件の単純主効果は有意ではなく($F(1, 5) = 1.62, ns$) ポストテストにおける指導条件の単純主効果 ($F(1, 5) = 79.37, p < .01$) とフォローアップテストにおける指導条件の単純主効果は($F(1, 4) = 10.27, p < .05$) 有意であった。

研究2 群間比較による流暢性指導の効果

X年10月からX+1年1月までA大学の学生11名他の計13名に指文字10字の指導を行った。13名が10字を獲得した後、6名には研究1と同じ流暢性指導を行い、統制群の7名には流暢性指導を行わなかった。流暢性指導の前後に研究1と同じプレテスト、ポストテスト、2週間後にフォローアップテストを行い、群間比較実験デザインで、流暢性指導の効果を探った。

Figure1 に群別のタイムトライアルにおける正しく読めた平均文字数の変化を示した。縦軸は正しく読めた平均文字数を表し、横軸は時期を表す。正しく読めた平均文字数について、指導群(2)×時期(3)の2要因分散分析を行ったところ、プレテストにおける指導群の単純主効果は有意ではなく($F(1, 11) = .09, ns$) ポストテストにおける指導群の単純主効果と($F(1, 11) = 193.76, p < .01$) フォローアップテストにおける指導群の単純主効果は($F(1, 11) = 31.13, p < .01$) 有意であった。

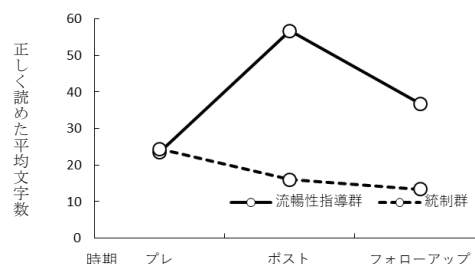


Figure1 群別のタイムトライアルにおける正しく読めた平均文字数の変化

(考察)

漢字指導や掛け算指導において、すでに流暢性指導は高い効果があると認められている。本研究でも、課題を獲得した後に学習を終了せずに、さらに流暢に読めるようなタイムトライアルを行うと、参加者内実験デザインでは、ポストテストとフォローアップテストで指導条件による有意差があり、群間比較実験デザインでは、ポストテストとフォローアップテストで流暢性指導群と統制群との間で有意差があった。指文字学習においても流暢性指導が効果的である可能性が示唆された。

また、本研究の参加者アンケートで、流暢性指導が「ゲームのように楽しめた。」等の感想が寄せられた。これは、先行研究の流暢性指導の利点を裏付けるものであった。

今後の課題は、研究対象を指文字46文字とし、実験参加者を増やして効果を確認することである。

聴覚特別支援学校では、今後も新しい教員に専門性の向上や手話・指文字の指導を実施する必要がある。その際、この流暢性指導を応用することで、新しい教員が楽しみつつ指文字を習得し、児童生徒たちと流暢なコミュニケーションをとることができる可能性があると思われる。

(文献)

Haring, N. G., & Eaton, M. D. (1978). Systematic instructional procedures: An instructional hierarchy. The fourth R: Research in the classroom (pp.23-40). Columbus, OH: Merrill.

Lindsley, O. R. (1996). Is fluency free-operant response-response chaining? The Behavior Analyst, 19, 21-224.

実験参加者には書面で研究参加の同意を得た。本研究は大阪教育大学倫理委員会の審査と承認を受けた。(OTSUCHI Keiko, NODA Wataru)